

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 5 月 28 日現在

機関番号：23102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370666

研究課題名(和文) 即興的場面における日本人英語学習者の口頭言語処理能力に関する研究

研究課題名(英文) A study on impromptu speaking proficiency of Japanese learners of English

研究代表者

茅野 潤一郎 (Junichiro, Chino)

新潟県立大学・国際地域学部・准教授

研究者番号：50413753

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では即興的スピーキングの場面での日本人英語学習者が話す英語の言語的特徴や心理的特徴について調査した。コーパスを用いて分析した結果、日本人は他国の学習者に比べ、時間稼ぎに有効な談話標識を使いこなしておらず、サイレントポーズの時間長が長く、その頻度が高いことが明らかになった。また、質的研究の結果、日本人大学生は、英語力が比較的高い学生であっても、即興的に話す場面において何らかの不安感を持っていることが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：This study mainly investigated the linguistic characteristics and psychological states of Japanese students when they were speaking English. The results of the corpus-based analysis showed that Japanese university students did not completely utilize time-gaining discourse markers and that their speech exhibited longer and more frequent silent pauses than did overseas students' speech. Moreover, the qualitative study revealed that the participants, who were university students with relatively high overall English proficiency, had some degree of anxiety regarding impromptu speaking.

研究分野：外国語教育

キーワード：やり取り 即興的発話 スピーキング不安 即興性 英語教育 口頭英語 つなぎ言葉 話すこと

1. 研究開始当初の背景

学習目的で作成された英語だけで学んだ日本人学習者が、生きた英語(authentic English)を聞いて理解できなかったという失敗談を村野井(2006)が挙げたように、特に音声面において、教室外で実際に使用されている英語を聞くのに苦労した経験を持つ者は多い。また、事前に準備したスピーチ原稿を入念に練習した上で話すことはできたとしても、即座に意見を求められるような即興的場面では思うように英語で相手に伝えられないという経験を持つ者は少なくないだろう。

学習者が英語の授業内においても即興的な発話(impromptu speech)に触れる必要性を主張した文献は多い。生きた英語は学習者の動機づけに有効であることは多くの研究で指摘されている。例えば、Rost (2011)は、英語母語話者との会話および英語母語話者間での会話に自然に生じる特徴を含んだ言語を目指すべきであると主張し、Nunan(1999)は学習者が教室内外での真のコミュニケーションに関わるには生きた教材を与えることが重要であると述べている。しかしながら、即興的な発話は教室に持ち込むのが最も難しいタイプの言葉であり(Willis, 1996)、生徒が即興的な発話に触れる機会は決して多くないのが現状である。

新学習指導要領が高等学校「英語表現 I」において、即興で話す活動を指導内容の1つに据えたことから、即興的場面でのコミュニケーションを重視していることが窺える。アウトプットの活動を行うには、その前提として大量のインプットを与えなければならない。即興で話させるのであれば、即興的場面のインプットを学習者に大量に与えなければならないが、そのような教材は多くなく、大量のインプットを与えられるかどうかは、教師が授業中に英語で話す能力、つまりティーチャートークのスキルに委ねられている。

そこで筆者らによる過去の研究では、リスニングにおいて即興的な英語が聴解度に与える影響について研究を進めた。国内外の音声教材を比較分析したところ、検定教科書で用いられる英語音声には、即興的な場面であるにもかかわらず、フィラーや言い直しといった音声言語特有の諸要素や、小林(2013)が指摘した口語英語特有の文法体系が欠落していることが明らかとなった。また、フィラーを含んだ英語音声を聴いた際の理解度への影響を調査した結果、意味単位を分断する位置にフィラーを挿入した場合、学習者の聴解度が下がることが判明した。このことから、学習者には、英語学習者向けに入念に準備された英語音声だけではなく、即興的場面の英語のインプットも多く聴かせる必要があることを指摘した。

しかしながら、依然として中学や高校の英語授業では即興的場面に焦点を当てることが多いとは言えない。やり取りの言語活動であ

りながらも、対話者に何を質問されるかを事前に把握できる状態で、また会話相手とどのような会話をするのかを事前に理解した上で会話を始めるようなペア活動も少なくない。そこで本研究では、過去の研究を継続発展させ、新たにスピーキングも視野に入れ、即興的スピーキングの場面での日本人英語学習者が話す英語の言語的特徴や心理面について調査したいと考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は以下の2点である。

- ① 即興的に話す場面において、日本人英語学習者は、他国の英語学習者と比較した場合、どのように発話を組み立てるかを明らかにする。
- ② 日本人英語学習者が即興で英語を話すことについてどのように認識しているか、またそれに対する意識と過去の学習経験との間に関連があるかを明らかにする。

3. 研究の方法

①について

EFL環境下の11ヶ国で英語を学ぶ大学生へのインタビューが収録された話し言葉コーパスが用いられた。収録された発話データのうち、英語圏滞在期間が6ヶ月以上ある学習者のデータを除外した。この抽出作業の結果、4ヶ国のサブコーパスでは英語圏長期滞在者が半数以上を占めたため、これらを研究対象から除外した。その後、日本人学習者のデータ(JP)と、日本人以外の6つのサブコーパスから得られたデータ(non-JP)を比較した。研究対象となった学習者の総発話語数はJPが32154語、non-JPが421856語であった。

両データを以下の3つの観点から分析した。

- (1) フィラー：*eh, er, em, erm, mm*の5種類のつなぎ言葉に加え、母語に起因するもの(L1フィラー；例えば日本語であれば「えっと」「うんと」)を分析した。
- (2) 談話標識(discourse marker; DM): Fung and Carter (2007)による分類のうち認知的DMと、小林(2013)の「時間稼ぎ(time-gaining)のDM」を分析した。
- (3) サイレントポーズ：本研究で使用したコーパスには、3種類の記号を用いて無言状態の時間長が表記されており、本研究ではこの表記法をもとに学習者の無言状態の時間とその頻度を分析した。

②について

メタ理論として構造構成的質的研究法(SCQRM)、データ収集法には半構造化面接法、データ収集後の分析には修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(M-GTA)を採用した。

全ての科目履修を終え、卒業を間近に控えた大学4年生10名の協力のもと、インタビューを行い、高校から大学に至る英語学習経験や、即興的に英語を話す時の印象やそのような言語活動時の気分について尋ねた。インタビュー後、テキスト化し、固有名詞等を匿名化し、ヴァリエーションを抽出し分析ワークシートを作成し、概念やカテゴリー間の対立関係や因果関係をモデル化した。

4. 研究成果

①について

(1)日本と他国の大学生英語学習者の10,000語あたりのフィラー使用頻度は、JPが831.0語、non-JPが860.3語、 $p = .07$ となり、有意な差は見られなかった。つまり、日本人大学生は他国の学習者と同様の頻度でフィラーを使用していた。しかしながら、英語で使用されるL2フィラーの使用頻度は日本人の方が1割ほど少なく (JP: 803.9語, non-JP: 860.1語, $p < .001$, OR=0.9)、その一方で、日本人学習者はL1フィラーを使用して、言葉を繋ごうとすることが明らかになった。ただし、他国のサブコーパスではインタビューアの65%が英語母語話者であったのに対し、日本人サブコーパスではインタビューアの母語は全て日本語であったことから、インタビューアの母語の違いがL1フィラーの使用頻度の差に影響を与えた可能性があることに注意を要する。

(2) 時間稼ぎのDMに注目すると、日本人学生の場合、10,000語あたりの出現頻度は*you know*が1.9語、*I mean*が0.9語、*well*が5.6語であり、それぞれのオッズ比は、順に、0.06, 0.1, 0.1であった。つまり、日本人英語学習者は、時間稼ぎDMを用いる頻度が他国の学生と比較して極端に少なかった。日本人英語学習者の場合、英語の授業を通して即興的に話す機会が依然として十分ではないことがこの原因の1つに挙げられるかもしれない。

*I think*の出現頻度はJPとnon-JP間に有意な差は見られなかった。日本人大学生と他国の大学生は同様の頻度で*I think*を用いていた。しかし、DM全体に占める*I think*の割合に注

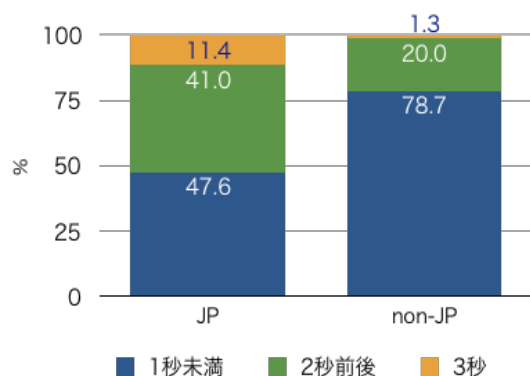


図1. サイレントポーズ時間長 (茅野・峯島, 2016)

目すると、non-JPが26.1%であるのに対し、JPでは74.0%であった。このことから、日本人英語学習者は時間を稼ぐときに*I think*を使用することにはそれほど困難が生じないものの、*you know*などを自由に使いこなしていないことが明らかになった。

一方、*in other words*や*let's see*は学習者の出身地にかかわらずどの学習者もほとんど使用していなかった。日本の検定教科書でもこれらの表現が扱われており、覚えるべきイデオムとして教師は指導することが一般的であるが、即興スピーキングではこれらの表現は出現しにくいことを教師は念頭に置いて指導する必要がある。他国の英語学習者も発話中に時間を稼ぐときには*eh*などのフィラーを多用していたことから、話す時に*in other words*を使わせようと指導するよりは、学習者が自然にフィラーを言えるようにすべきかもしれない。

(3) 図1のように、サイレントポーズの頻度はJPでは7.6語に1回であったのに対し、non-JPでは11.0語に1回の割合であった。また、non-JPではサイレントポーズのうち78.7%が1秒未満であったのに対し、JPでは1秒未満のサイレントポーズは47.6%しかなく、41.0%が2秒前後、11.4%が3秒以上であった。これらの結果より、日本人英語学習者はサイレントポーズの時間長が長くなる傾向があり、その出現頻度が高いことが明らかになった。

②について

全般的傾向として、研究対象の大学4年生は、高校在学時には「書き言葉・正確さ偏重」の学習の影響を受けていた。彼らはCEFR B1相当の英語力がありながらも、即興英語場面では不安感があった。即興場面では、言い直したり言い換えたりすることはできるが、時間稼ぎストラテジーの効果を認識しつつも時間稼ぎが上手にできないと感じていた。その一例は「(つなぎ言葉を)使えたら使おうと思うけど、まあ積極的には使わない」、「絶対使わない、ちょっと恥ずかしい」というコメントに見られた。これらの結果、彼らは英語を話す時はできれば準備してから話したいと感じ、その理由として、準備してから話すことの安心感を挙げた。例えば、彼らの回答には「準備する時間があるから話す方が、頭の中で整理する時間があるので、話す時には一回考えたことをもう一回再生すればいいだけなので安心感がある」、「(準備しないと)喋る前にすごく不安になる」という発言が見られた。このように、スピーキング抵抗感の大小にかかわらず、学生らは準備してから話すことに対して安心感を持っていることが明らかになった。

次に、スピーキングに抵抗感のある学生を抽出して分析したところ、上記の一般的傾向に加え、以下の点が明らかになった。高校で

の「書き言葉・正確さ偏重」の影響を受け、抵抗感の大きい学習者は、形式や内容に関して完璧主義になっていた。例えば、「高校で文法ばかり言われ続けたし、テストでも文法に関するものが多かったので、今も気にしちゃう」、「(話す時でも、前置詞や時制等を) 気にしてしまい、どっちが正しいんだろうって思ってそれで言葉に詰まる」という回答が見られた。また、彼らは高校在学時には即興で話す機会が乏しく、大学入学後に英語による授業が増えたことにより、授業への不安感が生じ、それが劣等感に繋がっていた。また、即興英語場面での不安感や、時間稼ぎができずに話すのをやめてしまうという要因も加わり、彼らは準備してから話したいと思っていた。その結果、話せるようになるために努力したいと思いつつも、即興の発話に対する拒否感というアンビバレントな感情も併せ持ち、その結果、ますます準備してから話したいという欲求に繋がっていると推察される。

スピーキングに対する抵抗感の少ない学生に注目したところ、高校在籍時には授業中に即興スピーキング活動があったものの、書き言葉・正確さを偏重する傾向があったことはスピーキング抵抗感の大きい学生と同様であった。大学入学後に英語を話す機会の多い授業が増えたものの、不安感を持つことなく、授業外においても英会話活動を長期的かつ自主的に行い、劣等感を持つことなく、即興場面の経験を蓄積することによって、即興場面を肯定的に捉えていた。コミュニケーションストラテジーのうち、自己解決ストラテジーを使い、言い直したり、言い換えたりして意思を伝えようと努力し、一方では回避削除ストラテジーに頼らず、話し続けることをあきらめず、即興で話す場면을英語能力向上に活かそうと心がけていた。しかしながら、その一方では、即興英語場面に対して不安感も持っており、時間稼ぎストラテジーを上手に操ることができないとも答え、話す前には準備する時間が欲しいと依然として感じており、スピーキング力向上への意欲と即興場面への不安感という二者の間で相反感情が生じていた。

これらの結果から、本研究の調査対象者は全般的に、英語を話す時には事前に準備したいと考えていた。スピーキング抵抗感の小さい学習者の場合、その理由は単に安心したいからという程度のものであるが、その一方で抵抗感の大きい学習者は「即興恐怖症」のような状態にあり、即興的発話を嫌悪する原因には、発話中に言葉に詰まったり間違えたりすることは良くないことであるという完璧主義的な認識があることが示唆された。

なお、②に関する詳細については、茅野(2018)を参照されたい。

<引用文献>

Fung, L., & Carter, R. (2007). Discourse markers and spoken English: Native and learner use in

- pedagogic settings. *Applied Linguistics*, 28, 410-439. doi:10.1093/applin/amm030
- 小林敏彦 (2013). 『図解 50 法則 口語英文法入門』 名古屋: フォーインスクリーンプレス.
- 村野井仁. (2006). 『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』 東京: 大修館書店.
- Nunan, D. (1999). *Second Language Teaching & Learning*. Boston: Heinle & Heinle Publishers.
- Rost, M. (2001). *Teaching and Researching Listening (Applied Linguistics in Action)*. Harlow, Essex: Pearson Education.
- Willis, J. (1996). *A Framework for Task-based Learning*. Essex: Longman.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 4 件)

- ① 茅野潤一郎 (2018). 「即興的スピーキングに対する意識と学習経験—英語中級レベルの大学生の場合—」. 中部地区英語教育学会紀要, 47, 17-24. (査読有)
- ② 茅野潤一郎 (2016). 「あらためて Spoken English に光を当ててみよう」. 新潟大学教育学部英語学会紀要, 48, 4-10. (査読無)
- ③ 茅野潤一郎・峯島道夫 (2016). 「日本人英語学習者は即興的発話でどのように時間を稼ぐか」. 中部地区英語教育学会紀要, 45, 1-8. (査読有)
- ④ 茅野潤一郎 (2015). 「協同学習を取り入れたリーディング授業—大学習熟度クラスでの実践—」. 中部地区英語教育学会紀要, 44, 191-196. (査読有)

[学会発表] (計 6 件)

- ① 茅野潤一郎・峯島道夫 (2017). 「日本人大学生の即興的スピーキングに対する意識とその関連要因—インタビュー調査に基づいて—」. 第 47 回中部地区英語教育学会長野大会 (信州大学, 長野市)
- ② 茅野潤一郎・峯島道夫 (2016). 「何の準備もなく英語で話す時、学習者はどう感じるか—一つなぎ言葉に焦点を当てて—」 全国英語教育学会 第 42 回 埼玉研究大会 (獨協大学, 埼玉県草加市)
- ③ 茅野潤一郎・初野拓巳 (2016). 「セルフアクセスセンターの効率化と学習促進を目指したシステムの開発」 外国語教育メディア学会第 56 回全国研究大会 (早稲田大学)
- ④ 峯島道夫・茅野潤一郎 (2015). 「LTD・話し合い学習法の効果の検証」 日本リメディアル教育学会第 11 回全国大会 (北星学園大学, 札幌市)
- ⑤ 茅野潤一郎・峯島道夫 (2015). 「即興的な会話で日本人英語学習者はどのように

ターンを維持するか」全国英語教育学会
第41回熊本研究大会（熊本学園大学，熊
本市）

- ⑥ 茅野潤一郎・峯島道夫 (2015). 「日本人英
語学習者の即興的発話の特徴 一時間稼ぎ
現象に焦点を当てて」第45回中部地区
英語教育学会 和歌山大会（和歌山大学，
和歌山市）

〔その他〕

講演：茅野潤一郎 (2015). 「あらためて
Spoken English に光を当ててみよう」新潟
大学教育学部英語学会第34回研究大会(新
潟教育会館，新潟市)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

茅野 潤一郎 (CHINO, Junichiro)
新潟県立大学・国際地域学部・准教授
研究者番号：50413753

(2) 研究分担者

峯島 道夫 (MINESHIMA, Michio)
新潟医療福祉大学・社会福祉学部・准教授
研究者番号：10512981

大湊 佳宏 (OMINATO, Yoshihiro)
長岡工業高等専門学校・一般教育科・准教授
研究者番号:70413755

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

なし